

書評

福岡正信『自然農法 わら一本の革命』

Book Review on “The One Straw Revolution” by Fukuoka Masanobu

井澤清一\*1

Seiichi IZAWA

AK47<sup>1</sup>一丁からの革命というのならば現実味もあろうが、福岡正信(1913-2008)の手になる『自然農法 わら一本の革命』<sup>2</sup>のわらは銃器ではない。文字通り、脱穀した後に残る廃棄物としての生糞<sup>3</sup>である。それはまた、わらしべ長者の糞、糞をも掴むの糞であり、無価値でちっぽけで信頼性に欠ける物の象徴とも見做される。独逸語に至っては、糞の詰まった頭(即ち、無智あるいは痴愚)という侮蔑表現すらあるほどだ。

かように取るに足らない物からでも大事が果たせ得ると、福岡正信は説くのである。

「革命というものは、このわら一本からでも起こせる…このわらは軽くて小さい。だが人々はこのわらの重さを知らない。このわらの真価を多くの人々が知れば、人間革命が起こり、国家社会を動かす力となる。文字通り革命になるのだが……」(福岡 184頁)

さてさて、この言動を以て、狂人の戯言あるいは夢想家の大風呂敷と見做すか、それとも積年の試行錯誤と不屈の農為<sup>4</sup>の果てに辿り着いた境地と受け取るか<sup>5</sup>は、通読した者に委ねられる。しかし、兎にも角にも本書が与えた衝撃は、反発であれ共感であれ大きく、世界200ヶ国以上で翻訳出版された。結果的に、名声や知名度<sup>6</sup>は海外での方が高くなり、その傾向は現在も続いている<sup>7</sup>。

国内にあっては目下、「有機農法万歳」「自然農法こそ正統」「微生物農法を行うべし」「否、酵素農法の方が優る」等々の百家争鳴状態となっている。便乗するやら寄生するやらして自己利益を図る輩も少なくないようだが、福岡は本書の段階で、それを予見していた(267頁)。それを鑑みても、没後15年目にして福岡を読み直し、再考する価値は大いにある、と評者は考える。往々にして抱かれがちな先入見を払拭するのも、書評の目的である。

【科学技術者としての福岡正信】

先ず特記すべきは、福岡正信の経歴<sup>8</sup>である。福岡は所謂準テクノクラートの理系人間であり、科学技術者としての学歴職歴研究歴を歩んで来た。即ち、岐阜高等農林学校(現岐阜大学応用生物科学部)卒業(1933)、横浜税関植物検査課勤務(1934)及び高知県農業試験場勤務<sup>9</sup>(1939)とのキャリアを重ね、その間、顕微鏡をのぞいて植物病理等の研究に励み、専門論文を執筆していたのである。実に「真っ当な」科学者なのだ。愛媛県伊予市にて本格的に<sup>10</sup>帰農し、自然農法に専念し始める(1947)のは、こういうキャリアを経て後のことである。

したがって福岡は、所謂神道系の新興宗教などで、突然にして神憑り体験をし、教祖となったような一介の農婦<sup>11</sup>などとはタイプが異なる。名主の家柄にして父親が村長を務める裕福な農家に生まれ、当時としては高等教育を受けたインテリゲンチヤーであった。

そんな科学技術者である福岡正信が、ある日を境に科学農法の否定ないし懐疑へと、真逆方向に舵を切る。

【転向契機の「体験」とその評価】

この点について福岡自身は、横浜税関時代に体験した出来事を、転換の契機として述べている。「精神分裂症の一步手前(12頁)」状態にあって、昼となく夜となく横浜を彷徨い歩いていた時のことだという。

「そのとき、ちょうどゴイサギが飛んできて、一声するどく鳴きながら飛び去ったんです…その瞬間、自分の中でモヤモヤしていた、あらゆる混迷の霧というようなものが、吹っ飛んでしまったような気がしたんです」(13頁)

あたかも禅僧の悟りの如き体験をしたようにも響く。その内実については、体験を共有していない部外者の知り得るところではないが、福岡は何か「垣間見えた」(15頁)と確信し、その「何か」について、「この世には何もないじゃないか」(17頁)「一切無用論(世の中のあらゆることは無価値だ、無意味だ。人間ってというのは何やったってだめなんだ)」(17頁)等の仕方で、十全とは言えないにしても、言語化しようとはしている。

問題なのは、本書全体の内における当該体験の位置づけである。読み方によっては、ともすると、同体験は神もしくは母なる自然による宗教的啓示であり、福岡はそれを伝える預言者(prophet)となったかのように解釈されがちである<sup>12</sup>。自ら自然農法を実践することは神の導きによるのであるから、神によって正当化される、との解釈すら為されるかもしれない。

しかし評者に言わせれば、それは(好意的)過大評価というものだろう。福岡は、ソクラテス的な自身の内なるダイモニオン(δαιμόνιον)<sup>13</sup>の声を聞いたわけでもなく、ましてやモーゼやマホメットの如き存在者を僭称するわけでもないのであって、本書の中でも自らを神格化しようとはしていない。反対に、一貫して「凡愚」「きちがい<sup>14</sup>」「狂人」「一人の百姓」を自称し、後世に自身の言葉を残そうと努めるどころか、「我が足跡を少しでも残さない」(275頁他)ように努めてすらいる。したがって当該体験は、体験者本人にとっては重要であっても、「神

\*1 岩手県立大学盛岡短期大学部国際文化学科

憑り」とまではいかない、と評者は見るし、だからといってそれでは駄目だと貶すわけでもない。過剰な神聖視をしない方が良くと言いたいのである。

駄目押しをすると、当該体験が自然農法へと導いたのだと福岡自身が感じているとしても、実は両者の間には厳密な必然性が無い。もし仮に当該体験が神憑りであって、その神なるものの命令として「帰農せよ」「自然農法を行うべし」との声を聞いたのなら、おそらく必然性は認められようが、実際にはそんな声も命令も無い。少なくとも本書には、それがあつたとの記述は無い。

あつた（成つた）のはただ先述の「一切無用」云々という覚知的境地に過ぎない。この境地を出発点として何処あるいは何へと向かうかは当人の自由な決定によらざるを得ないのであつて、当該境地自体が指図するものではない。だから帰農しないまま、出家し行乞して歩くも可能、禅寺に籠るのも可能、開き直って放蕩三昧に耽るのも可能、世を儂んで自殺するも可能、百姓ならで漁師になつたつて構わない。自然農法の実践へと収斂せねばならないとの論理的謂は無い。

だから評者としては読者に対して、「体験」の部分にあまり拘泥し過ぎることなく、先へと読み進めることを勧める。そうすることで福岡の価値が減じるものではない。

#### 【科学農法の自己超克】

すると見えてくるのは、福岡正信が具備する科学技術者としての「素地」の重要さである。この素地無くして科学農法の超克は無かつたというのが評者の所見である。

じっさい、第三章（汚染時代への回答）と第四章（緑の哲学—科学文明への挑戦）・第五章（病める現代人への食—自然食の原点）を読むと、福岡は近代科学や科学農法のど真ん中に身を置いて来たからこそ、一步身を引いて大所高所から眺めた際に、その限界や構造的将来的行き詰まり（食品公害・海洋汚染等々）について、見越し見通し見極めをつけることができたことが、評者にはわかつた。元来科学者であつたにもかかわらず、ではなく、科学者であつたからこそ、というところに（も）真理がある。謂わば、福岡正信という玄人が玄人の知見をもって、玄人業を自己超克するという構造なのだ<sup>15</sup>。

科学技術の玄人としての素地が、自然農法へと向かう試行錯誤の過程においても、寄与貢献しているのは否定しがたい。躓きを分析し、乗り越えようとするのに玄人の知見が要らないわけではないだろう。また、それに先立つ農業試験場での8年間にしても、科学農法と自然農法との比較研究を遂行していたのである以上、比較項たる前者についての知見が不可欠だったのは論を俟たない。

#### 【自然農法のテクネー】

順序が逆になるが、主に第二章（だれにもやれる楽し

い農法）から自然農法のテクネー（技術）について概説する。福岡による最も簡略な説明は次の通り。

「一口に言えば、農機具もいらない、農薬も肥料もいらない、そしてやり方といえば、ただ稲のあつるうちに、稲の頭の上から麦をばらまいて、稲を収穫した時に出来たわらを、その上にふりまいただけなんです」（5頁）

この単純なプロセス（「米麦連続不耕起直播」または「緑肥草生米麦混播栽培」とも呼ばれる）を繰り返すのみであつて、他には何もしないことに徹底する。農法のレシビは自然農法の四大原則（48-49頁）へと敷衍され、

- ① 不耕起（耕さないこと）
- ② 無肥料（肥料を与えない。但し、必要に応じてクローバーなどの緑肥を撒く）
- ③ 無農薬（農薬を使わない）
- ④ 無除草（除草をしない）。

これが完成形態となる。しかし、一朝一夕でここまで辿り着いたのではない。「あれもしなくていいんじゃないか、これもしなくていいんじゃないか」（48頁）との引き算的発想に導かれて試行錯誤を繰り返し、30年以上かけて徐々にひとつひとつ省いていったのである。

だから、昨日まで、あれもこれもして手間暇かけて育てていたものを、いきなり野にすっぽかし、「放任」（18頁）したのではない。それでは、ペットのチワワを突然、山に放つて野垂れ死にさせるようなものだ。事実、福岡は最初ミカン栽培で放任農法を行い、壊滅させる辛酸を舐めた。ミカンであれ稲であれ、その「自然型」「理想型」（71頁）へと整えていくことによってこそ、自然農法は可能となる。

細かい経験学習と工夫もまた、自然農法を成功させる上では必要になる。

例えば、「わらをふる」というとき、豊表の如く整然と根元に敷き詰めるべきか、ランダムに振りまくのがいいのか。また「わら」といっても、稲（の種籾）の上からふるべきなのは稲わらなのか麦わらなのか、逆に麦（の種籾）の上からふるべきなのは麦わらなのか稲わらなのか。どの選択肢を取るかによって、発芽や成長・収穫量などに大きな違いが出てくる。

さらに、不耕起状態で直播された籾は雀や鼠・ナメクジなどに食害されやすく、一つの対策として、粘土団子<sup>16</sup>にして播くことも考案されねばならなかつた。

かくて、何もしないで済ますためには、何かをしなければならぬ、ということだ。この点は、ラモン・マグサイサイ賞財団の調査書でも明確に指摘されている。

「福岡は・・・『何もしないで』作物を育てるには、そのための基礎となる作業が必要であることを理

解した。彼の仕事は何か？ 彼が自然だと考える環境にできるだけ限りなく近づけて、作物を産出できる環境を創り出すことである」<sup>17</sup>

#### 【自然農法への逆風】

ところが、折角テクネーを確立しても、福岡式自然農法が主流として普及することはなかった。何故か。

「肥料も農薬も、さらに農機具も使わないなんていうと、現在の社会の中では、非常にあたりさわりが多いから」(33頁 傍線強調は引用者による)

「あたりさわり」とは、要するに既得権益を侵害するということである。不耕起にすれば耕耘機(トラクター)が不要となり、直播にすれば田植え機が不要、無肥料にすれば化学肥料も有機肥料も不要、無農薬にすれば殺虫剤も病気の防除剤も不要、無除草にすれば除草剤も不要となるから、機械販売業者も化学農薬肥料販売業者も、介入する農協も無用となる。機械製造工場も農薬を製造する化学工場も要らず、使用される水も電力も石油原料も要らなくなる。国民的規模で福岡式が普及すれば、経済構造の大変革という形で、福岡言うところの「わら一本の革命」が起こってしまい、既得権益の擁護派にとっては憂慮すべき事態となろう。

福岡はまた、あたりさわりの元として、農業試験場の機構、あるいは大学(農学部等)の機構や研究方法を挙げている(30頁)。要するに科学者側のシステムやメカニズムおよび集団内部の同調圧力や保守的体質が原因となっているのである。だから福岡の田圃を学者や専門家、さらにはテレビ局(NHKなど)が視察に訪れて、称賛したり感心したりして帰ることは多々あっても、それきり沙汰止みで一向に自然農法の推進に着手しなかった。

#### 【有機農法への懐疑】

次いで、有機農法に対する福岡の懐疑的態度について述べる。読者の中には、自然農法も有機農法も似たようなものと思込んでいる向きもあるかもしれないが、福岡は断固として、それに与しない(第三章15節 自然農法と有機農法)。

有機農法ということで念頭に置かれているのは、有畜の堆肥重点主義とでも言うべきフランスの農法(150頁)や、日本の伝統的な堆肥農法、並びにカリフォルニアの牧畜農法(244-245頁)等なのであるが、福岡は技術的にも思想的にもこれと一線を画したい。

まず、技術の問題として、牧畜をやると土がやせる、と福岡は結論する。

「アメリカ大陸でも、初めスペイン人が畜産をやって、牛の糞尿が全部土に返っておれば、やせるはずは無いように見えますが、実際はやせさせてし

まっている。雑草が単純化するからです」(245頁)

カリフォルニアの農場を視察した際の言であるが、オーストラリアでもインドでも同様という。糞尿は土地を肥やすはずだと言う現代の科学者および同調する有機農法者に対して、真っ向から否定をつきつけるのである。

福岡はまた、思想的にも有機農法を懐疑する。

「結局、有機農法は…西洋哲学の考えに出発し、科学農法の一部に過ぎないのではないかと…科学農法と次元が同じである…ただ単に、有機物をやればいい、家畜を飼えばいい、そして、それらの三者が一体になったような農業というのが、一番いい農法である、という程度の考え方にとどまるのであるとすれば、この有機農法というものは、自然農法という趣旨は維持できないのではないかと」(150-151頁)

では、福岡式の自然農法にあつて、有機農法に欠けているものとは何だろう。福岡の答えは抽象的に過ぎるが、いちおう、「東洋哲学の立場、あるいは東洋の思想、宗教というものの立場」と述べてはいる。それが具体的に何を指すのかは明らかにされていないが、少なくとも有機農法との目標の違いだけは強調される。

「(自然農法の)最終の目標っていうものは、単に作物を作るだけじゃなくて、人間完成のための農法になってなきゃいけないんだ」(150-151頁)

#### 【残される謎】

だが、またしても読者は途方に暮れる。自然農法によって完成された人間(自然人)とはどんな存在なのだろう。何故、有機農法も含めた科学農法によって完成された人間(有機人とか)というものはあり得ないのだろうか、あり得るとすれば自然農法によるそれとどこが違う、どこに優劣があるのだろうか。外形的な差異にあるのではなく、内面・精神面にある、と勝手に推測するのは可能かもしれないが、それはそれで「内面・精神面とは何か」という新たな問いを誘発するだろう。

但し、推測するためのヒントめいたものは「あとがき」に見える。

「大切なことは、自然食も自然農法も自然人でなければ達成できないということである。三位一体であり、三者は同時に出発し、同時に達成されるものであり、すべては理想の里を造るためのものであるということを忘れてはならない」(267頁)

ところが、再び疑念が頭を擡げる。自然食ならで科学(有機)食と科学(有機)農法と科学(有機)人との三位一体では何故駄目なのか？ そも、自然とは何か、自

然人とはどんなものなのだろう？

困ったことに、福岡自身が、上記引用文の舌の根も乾かぬうちに、無知を告白している。

「だが、自然とは何か……自然人とは何か……この一言にすら答え得なかった」(267頁)

読者としては、科学がもたらす諸病理や構造的破綻事例として福岡が縷々述べているところから、そうでない状態が自然状態なのだ、福岡の言う自然の意味を否定的に付度把握するしかないらしい。

ただ、福岡の言う「理想の里」については、福岡の住む広大な自然農園と山小屋生活に、即ち大根と菜の花が花盛りで福岡言うところの「エデンの花園」に、ひとつのモデルを見出すことはできよう。これが、国民皆農とか全員一反百姓という形で普遍化拡散されれば、国家規模の革命体となり得るだろうが、あくまで「れば」の話である。だからこそ福岡は本書の出版当時(1983)、農園を非公開にして小屋にこもっていた。偏屈な隠遁生活に見えて、本人は幸せを満喫していたという。

「毎日、この農園がエデンの花園と、わくわくする想いで働けるだけで幸せである。自然農法は、永遠に未完成の道、自然は、人知人為で探し出せるものでも、創れるものでもないのだから、わたしは気楽に、瞳の内だけの幻の自然農園づくりを楽しんでいるだけである」(275頁)

瞳の内だけの幻の自然農園づくりとは・・・

何とも嘆息を禁じ得ない。これを自嘲とみるか、諦念あるいは達観とみるか、究極のオプティミズムなのか。それについては読者に委ねるしかない。

<sup>1</sup> 1947年式カラシニコフ突撃銃。史上、最も大量に世界に出回り、内戦内紛革命などでは定番の武器となった。  
<sup>2</sup> 現在流通しているのは原版ではなく、1983年に春秋社から出された方のものである。本書評に於いても、参照引用頁などにはこちらを用いる。

<sup>3</sup> 「生」であるのに注意されたい。家畜の糞などを混ぜて腐熟させた堆肥ではないし、刻んですらい丸ごと一本そのままの糞を指す。有機農法とは使い方が異なる。

<sup>4</sup> 昨今の環境思想家活動家気取りは、「農業」とも「農作業」とも言わずに、敢えて一字の名詞として「農」を好んで使う傾向がある。これが評者としては鼻について敵わないので、代わりに「農為」という。辞書には無い。

<sup>5</sup> 前者と後者は必ずしも二者択一ではない。福岡に私淑する人たちの中には、敬意を込めて「砂漠に種播く狂人」と呼ぶ者もいるし、福岡自身も、幾分は自嘲的に、前者の如く自認するような場合も多い(263頁他)。

<sup>6</sup> 受賞歴に関しても、亜細亜のノーベル賞とも呼ばれるラモン・マグサイサイ賞(1988年受賞)を筆頭に、海外の方が際立っている。

<sup>7</sup> 外高内低とはいえ、国内にも本書を通じて福岡の影響を強く受け、自身の農業に反映させている人々は少なく

ない。直播や不耕起・冬季湛水を試みる稲作農家然り、『奇跡のリンゴ』の木村秋則然りである。

<sup>8</sup> 仔細は前文と第一章に詳しい。

<sup>9</sup> 但し、試験場での8年間に於いては、表向き科学農法を指導し研究してはいたものの、密かに自然農法と科学農法との対比研究にも費やされていた(福岡19頁)。

<sup>10</sup> 福岡は本格帰農する前、1937年から短期間一時帰農している。ミカンで「自然農法」を試み、大失敗した。

<sup>11</sup> 天照皇大神宮教教祖の北村サヨ(1900~1967)はこの好例だろう。44歳にして突然神憑り体験(肚で何者かがものを言う)をし、知っているはずのない語彙を使い、人々に教えを説き始めたという。(断っておくが、評者はこれを貶める気はない。教祖はアメリカでも講演活動をこなし、評伝は在米大学の図書館にも収められているほどだ。評者はただ、福岡とはタイプが違う、という点を強調したいだけである)

<sup>12</sup> 福岡の講演会では、所謂宗教系と思しき人達が勝手に怪しい秋波を送り、福岡を持ち上げることも散見された。だが、福岡が手玉に取られていたわけではない。

<sup>13</sup> ダイモニオンはソクラテス自身の内にある、専ら「…してはならない」との否定命令形での声を発する。「…せよ」との肯定命令はしないので、為すべき行為は指示されない。百歩譲って福岡が似たような声を聞いたとしても、「自然農法を始めよ」との命令にはならない。

<sup>14</sup> 福岡自身がこの表現を使うので、ママ引用する。

<sup>15</sup> 似たような構造は哲学・思想の世界ではお馴染みである。L.ウイトゲンシュタイン(1889-1951)に、「ソリブシズムを徹底すると純粋な実在論に至る」との洞察があるが、必要な修正を施せば、これも然り。緩く解せば、極左思想を突き詰めていたところ、いつの間にか極右に着地していた、との例も然り。相対主義を貫いていたら、絶対主義に辿り着いてしまった、との例も然りである。

<sup>16</sup> 粘土団子は、現在、大手の種業者によって市販されているペレット種子(予めコーティングされている)の先駆けと言える。後年、福岡の活動は、海外での砂漠の緑化活動へと軸を移していくが、その際、粘土団子こそが緑化の武器として用いられた。団子には無数の種類の種がランダムに練り込まれており、その中から、謂わば適者生存のような形で、撒かれた環境に適するタネのみが発芽し根を伸ばす。適者の選択は自然に委ねられる。

<sup>17</sup> 福岡正信『福岡正信 自然に還る』春秋社1993年376頁